AsCA が設立するまでの経緯

原田仁平

Jimpei HARADA: The Way to the Establishment of AsCA

1. はじめに

アジア結晶学会の構想は、ポーランドで1978年IUCrの総会が開かれた折りに始まると言って良い様である。その折り、ヨーロッパ結晶学会(ECA)が結成され、IUCrの下部組織として認められる事になった。別に学会の結成は国際組織の下部組織である必要はないが、次のような陰の理由があると伺った。ヨーロッパは当時、東西に分割されていて研究者の交流もままならない冷戦下にあった。そこで国際組織の下部組織とすることで、東側の研究者との交流をスムーズにしようと言う政治的な配慮があった様である。また、その折りに中国がIUCrに加盟した。その様な状況下で多くの人が刺激を受けたようである。中国を含めたアジア地域の結晶学の学術交流を盛んにしようと言う気運が興り、オーストラリアのSabine、インドのKrisina教授等より日本に呼びかけがあった。日本ではこれを受けて前向きに進めるべきか、大いに議論があった。^{1) - 3)}

2. ハワイ ACA 会議

時を同じくして、ACAでも地域の学会を模索する動きがあった様である。その現れであろうと思うが、翌年、1979年の3月に日本結晶学会が協賛し、オーストラリアの結晶学者も多数参加する形のACAの年会在ハワイで催された。変調構造に関する国際会議も同時期に開かれたので、多数の日本人研究者が参加した。⁴⁾ 私もその一人であった。その折り、日本側から加藤範夫、細谷資明研連委員、米国側からACA会長のGlusker、前会長のCoppens、次期会長のWyckoff、中国からTang教授が集まり、アジア結晶学会の構想と言うより、環太平洋地域性格の案に対する話し合いが持たれた。⁵⁾ その結論は、参加各国の代表によるワーキンググループを設け、お互いの情報や意見の交換を計り、前向きに取り組む、ということとなった様である。その会合の後、学会の休憩時間であったか、学会が終わった後であったか、Coppens教授、Tang教授、Tang教授に同行していたDr. Shu、オー

ストラリアのSabine教授、それに細谷資明先生(?多少定かでない)と加藤範夫先生等がビールを飲みながら、上記の議題について、フランクな意見交換をされた。たまたま私は加藤先生に同行していて、フォーマルな会議でないその会話を傍聴させていただいた次第である。環太平洋では地域が大きすぎないか、との意見も出ていた。

ACAでのこの会合の報告が、1979年6月の末に開かれた結晶学研究連絡委員会(学術会議の下部組織、ここを通して日本はIUCrの加盟国になっている、当時の委員長は星埜禎男先生)で、“アジア結晶学会の構想について”と題して加藤先生が報告され、その報告に基づいてこの問題が審議された。米国ではACAが窓口になっている経緯もあるので、研連よりも日本結晶学会がわが国の窓口とした方が良いとの結論に至っている。この要請に従い、翌月に開かれた日本結晶学会の評議員会で、アジア・太平洋地域の結晶学の連絡について議論がなされ、3名程度の特別委員会を一年限りで設置してこの問題に対処する事となった。この渉外活動の委員長を私が仰せつかった。私が日本結晶学会、結晶研連に関わりを持つに至ったのはこの時からである。

3. バンガロー会議

1981年1月、IUCr主催でComputingのWinter Schoolがインドのバンガローで開かれる予定があった。その折りにアジア・太平洋結晶学グループの相談を開こうという呼びかけが、オーストラリアのSabine教授が中心となってもたらされた。結晶学会の特別委員会は、代表を派遣し、日本の意向を表明しては、と提案した。しかし、この後カナダ・オッタワで開かれる1981年のIUCrの総会までにECAに相当する組織を作ることは、時期尚早であろう、との意見が多数を占めた。その前に学会レベルで積極的に相互の情報交換をはかる努力を重ねるべきである、との結論に達した。結局、この会合に代表者を派遣するのを見合わせる事となった。その結果として会合は成立を見なかった様である。

1年限りの特別委員会では長期的な対応ができない事

から、日本結晶学会では渉外委員会を設ける事が議論された。

4. オーストラリアの結晶学者

1981年日本結晶学会は特別委員会を改組し、渉外委員会とし、引き続き、私が幹事を受け持つことになった。渉外委員会規定が定められ、幹事の任期を2期4年に限定したより多くの会員が関与するのが望ましいという議論に基づく。

その年の10月より年末に至る3ヶ月間、私はオーストラリアのメルボルン大学物理教室に客員教授として招かれ、メルボルンに滞在することとなった。そのお陰でオーストラリアのNational Committeeのメンバーである、Dr. A. Moodieを始めとして、オーストラリアの結晶学者との情報交換をはかる機会を得た。私は日本の見解：1) National Committeeを通しての交流より学会が窓口となった方が良くと考えていること、2) まず学会レベルで積極的に相互の情報交換をはかる努力を重ねるべきである、と考えている事をA. Moodieさんに伝えた。それに対してオーストラリアの見解は、1) 地域の活性化を図る使命があると認識していること、2) したがって、環太平洋的なものでなく、オーストラリア、日本、中国、インドを含む地域に限定すべきである、という考えに基づいている事を知り、また要約した文章を見せられた。追って、オーストラリアは正式に文書で日本へ呼びかけるので、と協力の依頼を受けた。私は、この機会に、メルボルンから、西オーストラリアのパースをまわり、Dr. E. N. Maslen, Dr. S. R. Hall等とも意見交換をして帰国した。

年が明けて1982年、これら得られた情報は研連の委員長（星埜植男先生）および日本結晶学会会長（当時加藤範夫先生）に報告し、研連の委員会および結晶学会評議員会でそれぞれこの問題についての意見交換をはかって頂き、オーストラリアのNational Committeeからの提案があった場合にはその討論内容に則して対処する事となった。

先にも挙げたように、オーストラリアの研究者は地域の活性化に使命感を持っていて、この問題に積極性がある。対して、日本の渉外活動は受動的である。そこに相違を感じた次第である。脱亜入欧の考えが消え失せないで嘆いた記憶がある。アジア地域結晶学会の設立に関する意見交換は、その後、オーストラリアと日本結晶学会の渉外委員会との間で続けられた。私はアジアのニューズレターを研究室の費用で発行し、アジア結晶学連合の結成を呼びかける試みをした。この間、難問をクリアする事ができたのは、東南アジアの事情に詳しい浦上澤之氏の参加によるところが大きい。

5. ハンブルグ会議

オーストラリア結晶学会（The Society of Crystallographers in Australia）の会長Professor T.M. Sabineより、1984年8月、ハンブルグで開催予定のIUCrの会議の折りにこの問題の会合を開きたい、代表者を派遣して欲しい旨の連絡が会長宛に届いたのは、その年の2月である。4月、および7月の定例の評議員会で審議し、日本は原則的に賛成すること、3人の代表者（星埜研連委員長、長倉結晶学会会長の他原田）が参加する旨返事をした。

ハンブルグでの会合は8月13日、午後5時よりProfessor T.M. Sabineの司会で進められ、以下の4項目を確認して終了した。参加者はオーストラリア（10名）、インド（6名）、中国（3名）、日本（6名）、香港（1名）、台湾（1名）の合計27名である。その他シンガポール、インド、韓国、マレーシア、ニュージーランド、パキスタン、タイの国々よりの9名から、参加できないが、賛意を表した返事を受けているとの報告があった。⁶⁾

- 1) アジアの結晶学会の結成について賛否が問われ、反対国は無く、原則的に賛成が確認された。
- 2) 英語国であるオーストラリアがアジア結晶学会の定款（案）を準備する。
- 3) 定款（案）を関係国に配布、1年の期間の検討期間を置き、意見をオーストラリアによこす。
- 4) 1987年8月、オーストラリア・パースで開かれる予定のIUCr国際会議の折り、会合を持ち、意見交換を行った後、賛意が得られれば学会も結成する。もし得られない場合、結成を取りやめにする。

この会議で、司会者が台湾の意見を聞く際、台湾国の意見は？と云う表現を用いた。これに対して、中国は1つであって、台湾国は存在しないとの注意が中国代表より述べられた。アジア結晶学会運営に難しさのあるのがクローズアップされる一幕もあった。この問題は、台湾は結晶学者のグループとしてAsCAでは認め、その後問題は起こらなかった。しかし、台湾が正式にIUCrで投票権を持って加盟できる様になったのは、中国の了解のもとで、1国内で2つの組織を認めるIUCrの定款が改定された1996年、シアトルの総会の時である。

6. アジア結晶学連合定款案

オーストラリア側では、学会長が西オーストラリア大学のDr. S.R. Hallに、秘書がDr. R.J. Hillに代わり、1985年6月Rod. Hillよりアジア結晶学会の定款（案）が届けられた。日本では私は2期の任期を終え、浦上澤之氏が渉外委員会幹事の任にあった。この案を渉外幹事が中心になって検討し、4つの問題点のあることが7月の定例評議員会で提示された。日本からの改定案を浦上氏が半年か

写真 オーストラリア、パースでAsCA設立後の記念写真、役員と各国の評議委員（198年8月17日）。前列中央がSyd. Hall、右側が筆者。（Asian Crystallographic Association. The first meeting of the ASCA council at Perth (August 17, 1987).）

けて創案する事になり、11月の定例評議員会に改訂案が提出された。これらの経緯は文献6)の報告に詳しく述べられているので、ここでは割愛するので参照して頂きたい。1つだけ大きな問題を取り上げると、学会の名称の変更がある。オーストラリア側からSouth-East Asian Regional Crystallographic Associationの名称が提案されて来たが、次の点で適切でないので変更を求めたことである。日本、オーストラリアは通常東南アジアに含まれないので適切さを欠くのではないかと、との意見が出て、単にAsian Crystallographic Associationを提案する事となった。これを含めた改定案は更に小委員会を設けて検討され、次に記すような経緯から1986年私がオーストラリアに赴いてDr. R. HillとDr. S. Hallに示し、全面的に受け入れてもらった。

1987年の8月にはオーストラリアでIUCrの国際会議が開催され、そこでアジア結晶学会の設立も予定されている。かつ私は研連の渉外委員を務めていた経緯もあった。その様な立場から、私は浦上氏の改定案を携えて、オーストラリアに赴き、直接我が国の意向を説明し、合意を得ておくことの必要性を感じていた。そこで、オーストラリアの結晶学者との繋がりを密にする必要性も訴え、学術振興会の海外派遣研究員に応募する事にした。幸いこの申請は1986年度に採用され、3週間に渡って、シドニー、ルーカスハイツ、キャンベラ、メルボルン、パースの研究機関を訪れ、多くの研究者と交流を深めることができた。1986年5月頃であったと思う。メルボルンではRod Hillに会い、パースでSyd Hallに会い、日本の改定案を示し議論した。Syd HallはすでにRod Hillより改定案が渡されていたようであるが、一日検討したい申し出があった。翌日、顔を合わせると、非の打ち所が

ないdraftであると、私の目を見ながら、全面的に採用させてもらいたい、との申し出があった。そして、私に握手を求めた。浦上氏の努力がここで実を結んだ訳である。私はパースよりシンガポールを回って帰国した。

7. アジア結晶学連合の設立

予定通り第14回IUCrの総会、国際会議開催中の1987年8月14日、アジア結晶学連合設立準備代表者会議が西オーストラリア大学Dr. S. R. Hall教授の議長のもとで進められた。提案された定款の原案が一部修正された後、全出席者の賛成のもとでアジア結晶学連合は設立を見た。Executive memberは3名、初代会長としてProfessor S.R. Hall（オーストラリア）、副会長にDr. M.A. Viswamitra（インド）、秘書・会計として私、原田（日本）が選出された。また、設立されたアジア結晶学連合は第14回IUCr総会でIUCr傘下の地域連合体として承認されるに至った。詳細は文献6)を参照して頂くとして、ここでこの稿を終えることにする。

文 献

- 1) 結晶学研究連絡委員会議事要旨（第11期・第1回）日本結晶学会誌 **22**, 25 (1979).
- 2) 結晶学研究連絡委員会議事要旨（第11回・第2回）日本結晶学会誌 **22**, 235 (1979).
- 3) 結晶学研究連絡委員会議事要旨（第11期・第4回）日本結晶学会誌 **22**, 294 (1979).
- 4) 加藤範夫：巻頭言、日本結晶学会誌 **22**, 281 (1978).
- 5) 「アジア結晶学会計画について」渉外委員会、日本結晶学会誌 **27**, 298 (1979).
- 6) 原田仁平：「結晶学研究連絡委員会議事録（第13期・第7回）およびアジア結晶学会設立の報告」日本結晶学会誌 **30**, 63 (1987).

プロフィール

原田仁平 Jimpei HARADA

名古屋大学名誉教授、現在は理学電機(株) X線研究所所長

Professor Emeritus, Nagoya University; Director, X-ray Research Laboratory, Rigaku Corporation
〒196-8666 東京都昭島市松原町3-9-12
3-9-12 Matsubara-cho, Akishima-shi, Tokyo 196-8666, Japan

Tel. 042-545-8139, Fax. 042-546-7090

e-mail: harada@rigaku.co.jp

最終学歴：東京工業大学大学院理工学研究科物理専攻中退

専門分野：物性物理学、特に結晶相転移と前駆現象、X線の表面、薄膜から散乱、回析結晶学

現在の研究テーマ：回析結晶学全般、実験室用X線源と光学素子

趣味：絵画

略歴：1994年名古屋大学定年退官、同年日本結晶学会会長、96年電気通信大学定年退官